

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red
Cross Kyushu International College of
Nursing

A 大学看護学生の国際的活動の実態・意識・希望に
関する調査

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2025-03-31 キーワード (Ja): 国際的活動, 看護大学生, 意識調査 キーワード (En): International activities, nursing college students, awareness survey 作成者: 宇都宮, 真由子, 小手川, 良江, 菊池, さよ, 鬼丸, 美紀, 高瀬, 理恵子, 吉原, 駿 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15019/0002000103

著作権は本学に帰属する。

資料

A大学看護学生の国際的活動の実態・意識・希望に関する調査

宇都宮 真由子¹⁾ 小手川 良江²⁾ 菊池 さよ²⁾ 鬼丸 美紀²⁾ 高瀬 理恵子²⁾ 吉原 駿²⁾

本調査は、学生への国際経験の機会創出の支援の方向性について検討することを目的に、A大学看護学生の国際的活動の実態・意識・希望に関する調査を行った。看護学部1年生から4年生を対象にMicrosoft Formsを用いた無記名の自記式質問紙調査を行った。調査項目は、【国際的活動の実態】【国際的活動への意識】【国際的活動への希望】の3つで構成した。回収数は130名（回収率29.8%）であった。調査の結果、学生の約4割に海外渡航経験があった。渡航先としては、アジアや太平洋州と比較的飛行時間が短く、日本から近い国への渡航が多いことが特徴的であった。また、外国人との交流について約6割の学生が日常の中で外国人との交流を経験していた。在学中の国際的活動や海外研修については、参加したい学生が約6割いる一方で、時間のなさや語学への自信のなさによって、国際的活動をためらう学生も少なくない状況もあった。このような状況から、学生への国際経験の機会創出の支援の方向性として、学生に対する海外研修や国内における国際的活動に対する情報提供と動機づけ、語学学習の促進や正課外活動で学べるプログラム等の工夫等が重要であると考えられる。「国際」に興味を持って入学してくる学生が、赤十字の看護学生として4年間国際的活動へのモチベーションを維持しながら成長できる仕組みを、国際看護実践研究センターを中心に全学的に取り組む必要性が示唆された。

キーワード：国際的活動、看護大学生、意識調査

I. はじめに

社会の国際化・グローバル化が進むなか、今や看護職にとって国際的視点は欠かせないものとなっている。平成23年3月、文部科学省「大学における看護系人材養成のあり方に関する検討会」では、今後の学士課程における看護系人材養成において、国際性豊かな人材養成を目指すことが示された（文部科学省、2011）。令和4年には在留外国人登録者数は約300万に上り（法務省、2022）、国内の医療・看護の場面においても、外国人への対応が求められる機会はめずらしくなくなっている。また、超高齢社会を迎え、年々労働人口が減少するなか、外国人の同僚と共に働く機会も増加することが予測される。看護学部の学生を対象とした国際的活動に関する意識調査（濱畑，片岡，米田，平井，古田，2004，p. 27）では、語学習得のための留学や海外の看護事情への関心があることが示されている。一方で、田村，丸山，米田，溝畑（2014，p. 27）による

と国際的な活動に関わる際の支障として経済面や語学能力の不足などが示されていた。看護学生は、国際経験に関心があっても、経済的な問題から経験ができない状況もあると考えられるが、在日外国人の増加やインターネットの普及もあり、学内での活動においても工夫することにより、海外経験につながる基礎的な力を養うことができる可能性がある。

A大学は、赤十字の人道精神に基づきグローバルな教育プログラムを有し、国内外で活躍できる看護師を養成する大学として設立された。平成25年には、A大学の国際活動のあり方や、その推進方策等を専門的に研究・提言し、A大学がグローバル時代に対応する看護・保健・福祉の教育拠点となることを目的として、国際看護実践研究センター（以下、センター）が開設された。これまでセンターでは、国際社会で活躍できる人材を育成するために、看護学部生に向けて、正課外活動として、学生が中心となって企画・運営を行い国内外の知見を深めるカフェ・ミーティングや国際シンポジウム、外国人と会話する機会としてイングリッシュ・カフェ、自分の好きな時に英語が勉強できるe-learning、独

1) 独立行政法人国際協力機構 九州センター・前日本赤十字九州国際看護大学

2) 日本赤十字九州国際看護大学

立行政法人国際協力機構 Japan International Cooperation Agency (JICA) からの受託事業である研修への参加の機会を設けてきた。2019 年以降は、新型コロナウイルス感染症の世界的流行によって、A 大学看護学生の国際交流や国際的活動の機会は縮小せざるを得ない状況となっていたが、今後はその制限も徐々に緩和されることが期待される。そのような中、センターとして A 大学看護学生の希望を反映した活動を模索している。そこで本研究では、A 大学看護学生に対する国際経験の機会創出の支援の方向性について検討することを目的に、A 大学看護学生の国際的活動の実態・意識・希望に関する調査を行った。

Ⅱ. 研究方法

A. 研究デザイン

本研究は、実態調査による量的記述研究である。

B. 用語の定義

国際的活動：国内外の場所を問わず、異なる国や文化間の交流を通じて世界的なひろがりの中で活動すること。

C. 調査対象

2023 年 4 月時点の A 大学の看護学部 に所属する 1 年生から 4 年生 435 名を対象に調査した。

D. 調査内容とデータの分析方法

国際的活動に関する意識や実態について Microsoft Forms を用いた無記名の自記式質問紙調査である。調査項目は、【国際的活動の実態】【国際的活動への意識】【国際的活動への希望】の 3 つで構成した。

【国際的活動の実態】では海外渡航経験・外国人との交流・正課内外活動の参加状況・言語の習得状況について、【国際的活動への意識】では国際的視野（異文化理解・対応力）の必要性について、【国際的活動への希望】では大学時代に行いたい国際的活動について問うた。結果は、対象者の属性と傾向を把握するために単純統計を行った。

E. 調査方法及び調査期間

調査方法は、Microsoft Forms を用いた無記名式の自記式質問紙調査で行った。

調査期間は 2023 年 6 月 27 日から 8 月 18 日で、データ収集期間は、対象者への説明後 3 週間とした。収集終了の 1 週間前と、前日に学内ポータルサイトにて研究協力のリマインドを行った。

F. 倫理的配慮

本研究は、日本赤十字九州国際看護大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号 23 - 001 号）。

教員からの調査依頼であり、調査参加者に強制力が働く可能性があるため、授業科目を担当していない研究者が対象者に文書及び口頭で本研究の目的や倫理的配慮などを説明し協力を依頼した。

説明文書に対象者の匿名性と任意参加の保証および本研究への参加・辞退によって不利益を被ることはないことを明記し、アンケート回答用の Microsoft Forms に研究参加の意思の確認欄を設け同意を得た。

Ⅲ. 結果

アンケートの回答者数は 130 名（回答率 29.8%）で、回答者の多い順に 3 年生 46 名（35.4%）、1 年生 41 名（31.5%）、4 年生 27 名（20.8%）、2 年生 16 名（12.3%）であった。

A. 国際的活動の実態

1. 海外渡航経験の有無・渡航先・目的と内容

海外渡航経験の有無では、「海外渡航経験がある」と回答した学生は 130 名中 54 名（42%）であった。渡航先としては、韓国 19 名が最も多く、次いでシンガポール 17 名、オーストラリア 14 名、台湾 11 名の順に多かった（図 1）。目的と内容としては個人旅行 28 名が最も多く、留学 26 名、修学旅行 24 名と続いた（図 2）。

2. 外国人との交流と内容

外国人との交流について「現在ある」と回答した学生は 130 名中 23 名（18%）であり、「過去にあった」学生は 52 名（40%）、「ない」学生は 55 名（42%）であった（図 3）。交流内容としては、外国人の友人がいる、留学・修学旅行での交流、バイト先での接客や道案内を行った、小学校・中学校・高校での外国語指導助手との交流、親戚が国際結婚をして親戚に外国人がいる、家族ぐるみで交流している、世界水泳大会などのボランティア、本学正課外活動のイングリッシュ・カフェなどが挙げられた。

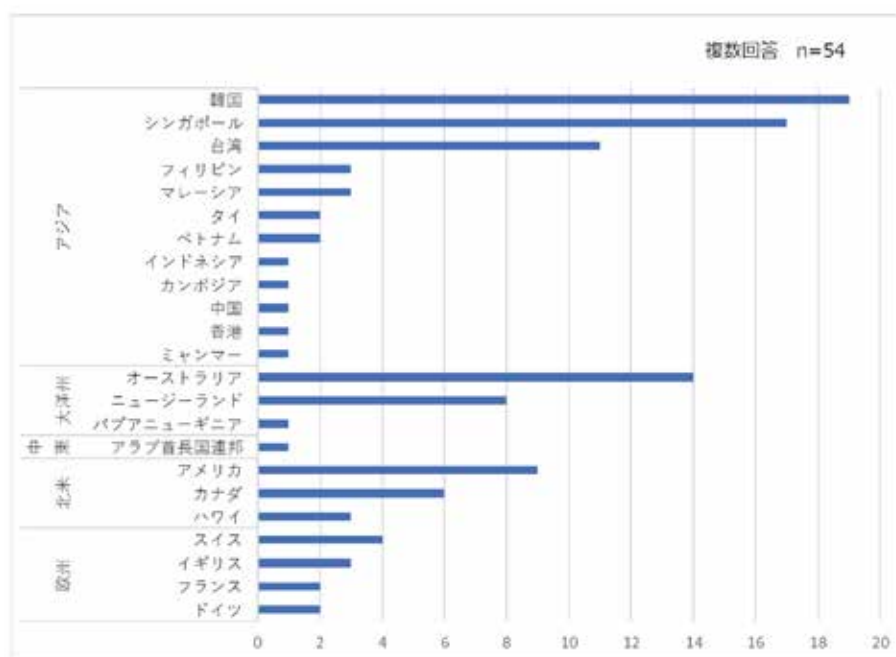


図1 渡航先

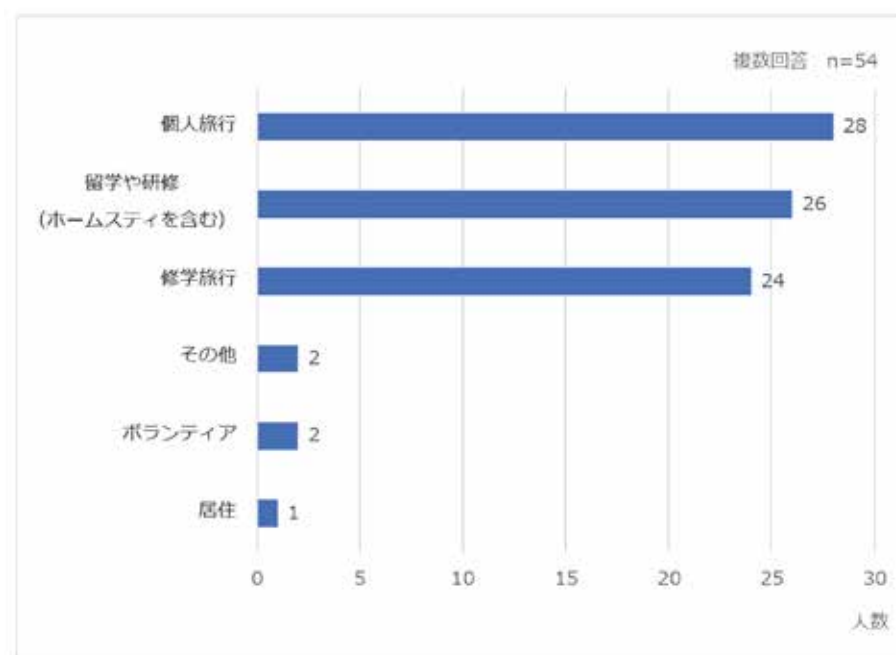


図2 渡航目的

3. A大学の行っている国際に関する活動への興味・参加状況

A大学の行っている国際に関する活動（授業科目を含む）への興味や参加状況について「興味がある・参加したことがある」と回答した学生は130名中66名（51%）であった。また、興味がある・参加したことがある科目またはイベントとしては、全学年とも選択科目である異文化間コミュニケーションが多かった（表1）。「興味がない・参加していない」学生は130名中64名（49%）であった。国際的活動に興味・参加していない理由としては、「語学に自信がない」44名が最も多く、「興味はあるがハードルが高い」26名、「余裕がない」21名、「興味関心がない」18名、「時間が合わない」17名という結果であった（図4）。

ンが多かった（表1）。「興味がない・参加していない」学生は130名中64名（49%）であった。国際的活動に興味・参加していない理由としては、「語学に自信がない」44名が最も多く、「興味はあるがハードルが高い」26名、「余裕がない」21名、「興味関心がない」18名、「時間が合わない」17名という結果であった（図4）。

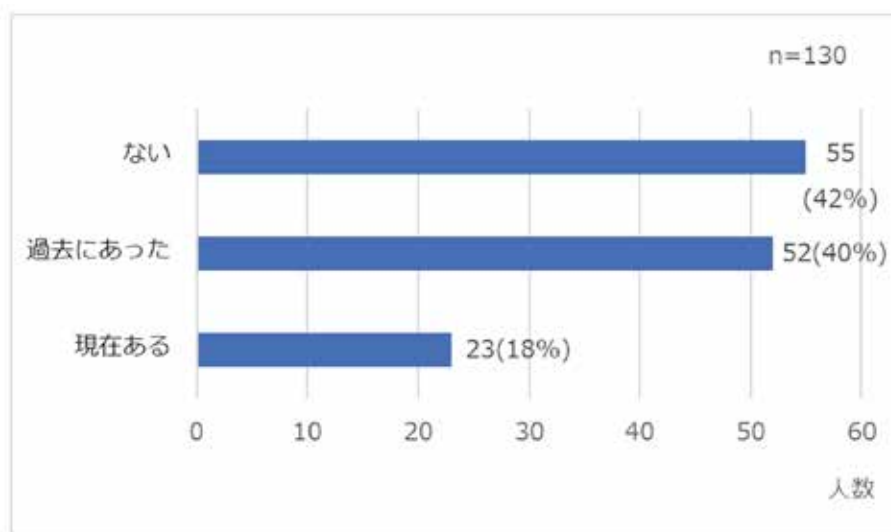


図3 外国人との交流

表1 学年別興味がある/参加した科目またはイベント

		n=63 複数回答			
	科目名またはイベント名	1年生 (n=27)	2年生 (n=8)	3年生 (n=20)	4年生 (n=8)
選択科目 1年	異文化間コミュニケーション	17人	5人	17人	6人
	韓国語Ⅱ	8人	1人	3人	1人
選択科目 2年	スペイン語Ⅱ	3人	1人	2人	0人
	フランス語Ⅱ	6人	2人	2人	0人
選択科目 3年生	英語Ⅲ	9人	4人	10人	3人
選択科目 4年生	英語Ⅳ	9人	0人	5人	2人
	医療英語	14人	0人	1人	0人
イベント	JICA 研修	9人	0人	0人	0人
	国際シンポジウム	10人	0人	8人	1人
	カフェ・ミーティング	14人	4人	6人	1人

4. 言語の習得状況

外国語検定受験の有無について「ある」と回答した学生は130名中100名(77%)であった。その外国語検定の種類としては、実用英語技能検定99件、TOEIC 26件、英語4技能検定GTEC 2件、実用フランス語検定2件、フランス語学力テストTCF 1件、TOEFL 1件であった(図5)。日常会話程度の能力を有している言語の有無については、「ある」と回答した学生が130名中24名(18%)で、その言語の種類としては英語17名、韓国語9名、スペイン語2名、その他1名であった(図6)。外国語の定期的な学習機会の有無については、「ある」と回答した学生は130名中9名(7%)であった。学習している言語の種類は、英語6名、韓国語3名であった(図7)。また、この9名において外国語の学習の頻度は、「週に1回」3名(33%)、「週に2～3回」2名(22%)、「毎日」が2名(22%)、「月に1回」1名(11%)、「そ

の他」1名(11%)であった(図8)。学習方法の自由記載には、「アプリ使用」、「講義や文法のやり直しを自分で実施」、「ドラマを見る」などが挙げられた。

B. 国際的活動の意識

1. 看護職として働く際の国際的視野(異文化理解・対応力)の必要性

今後看護職として働く際の国際的視野(異文化理解・対応力)の必要性について、「そう思う」58名(45%)、「非常にそう思う」52名(40%)、であり8割強の学生が必要と回答した(図9)。看護職として英語あるいは他言語の習得の必要性については、「必要である」が130名中110名(85%)であった。他言語が必要な理由として、「外国人患者とのコミュニケーションをとる可能性がある」という答えが93件(85%)と最も多かった(図10)。看護職に他言語の習得が必要ではない理由としては、「国内で



図4 国際活動に興味・関心がない理由

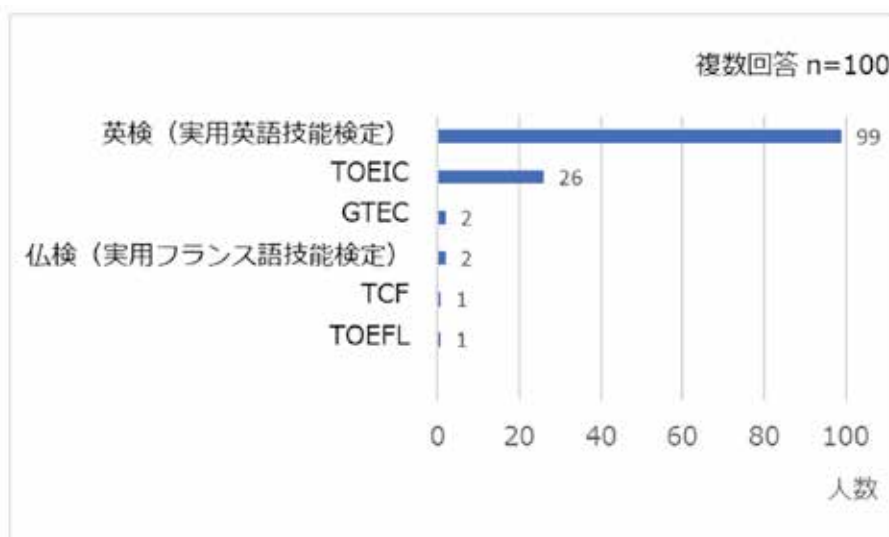


図5 受験したことのある外国語検定の種類

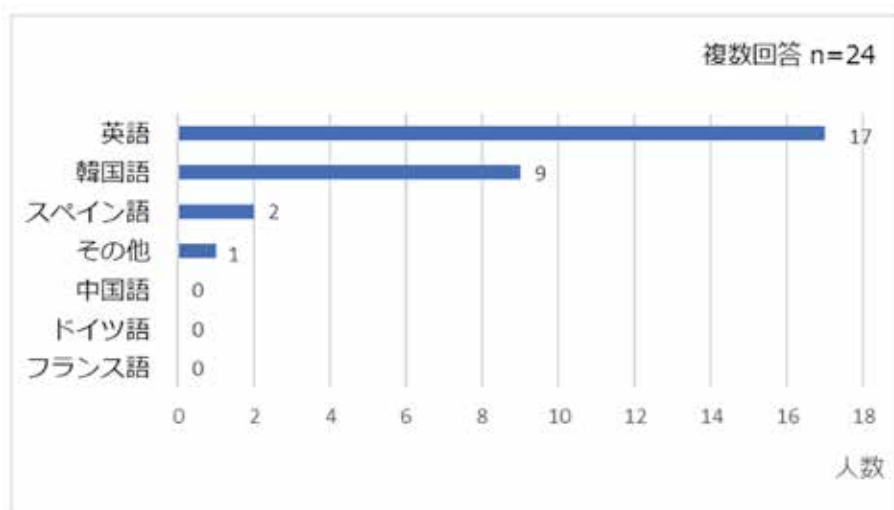


図6 日常会話程度の能力を有している言語の種類

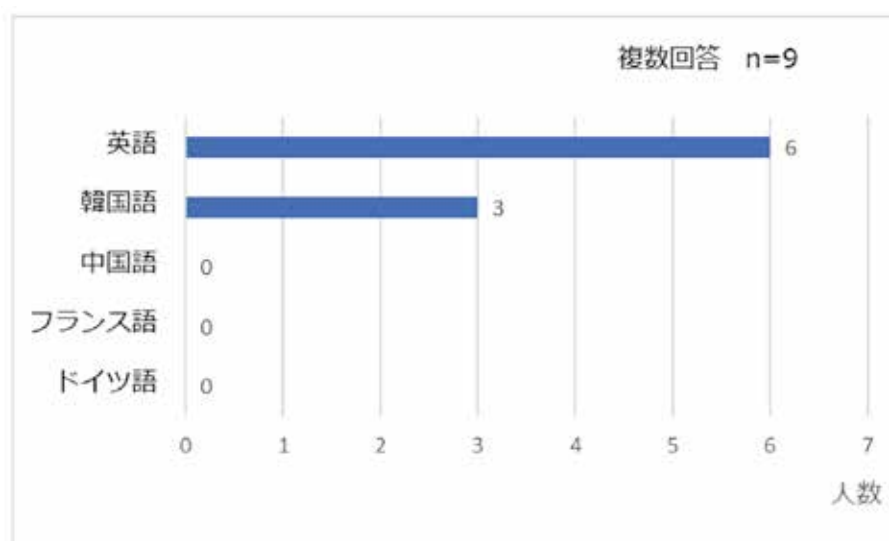


図7 定期的に学習している言語の種類

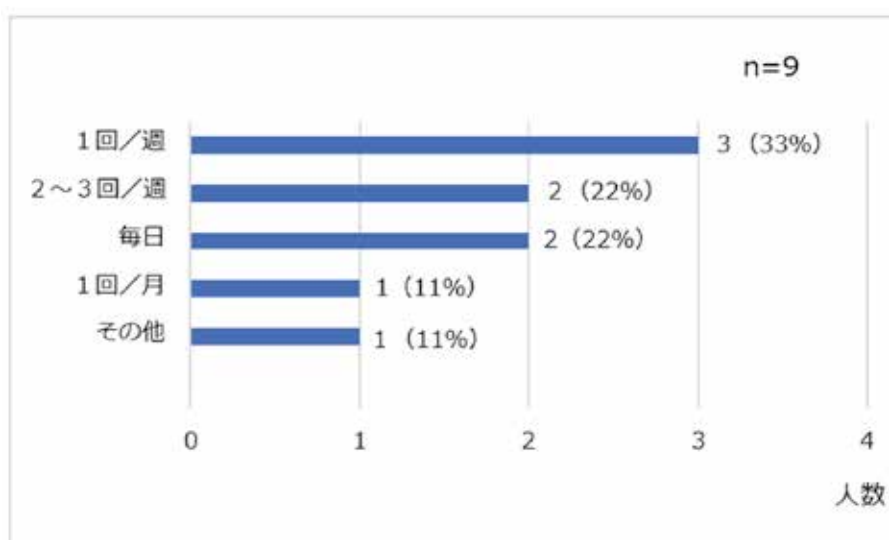


図8 外国語の学習頻度

働く予定である」との回答が16名(84%)と最も多かった(図11)。

C. 国際的活動への希望

1. 国際的活動への希望内容

大学時代に国際的活動を行いたいかの質問に「行いたい」と回答した学生は130名中80名(62%)であった。国際的活動を希望するこの80名において国際的活動で行いたい内容は、「海外研修」58名が最も多く、次に「語学研修」48名を希望する者が多かった(図12)。回答者全体の海外研修の希望については「希望する」が130名中71名(55%)であった。海外研修で希望する内容としては、「病院・医療施設の訪問」が52名、「現地の人や学生と

の交流」および「語学研修」がそれぞれ50名、「文化体験」36名、「看護・医療に関する講義」32名、「ボランティア」27名、「外国語を用いた発表」9名であった(図13)。海外研修に関する費用の上限額としては、「20万円以内」が最も多く26名(37%)、次に「10万円以内」23名(32%)、「30万円以内」14名(20%)であった(図14)。

2. その他の意見

自由記載欄には、「国際看護コース(国際看護に興味があり選抜された学生のみ履修可能なコース)以外の学生が受けられる研修を設定してほしい」、「研修時の経済的支援をしてほしい」、「英語で実施する講義をしてほしい」など具体的な要望が書かれ

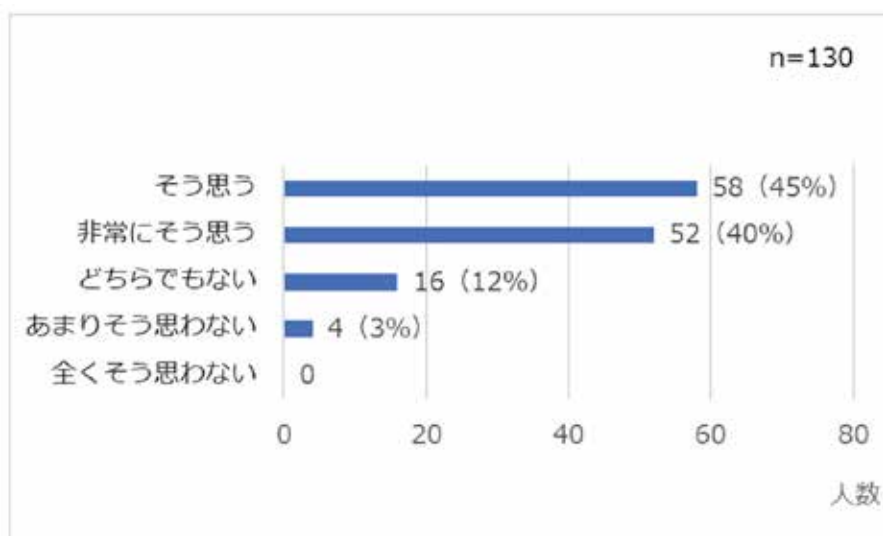


図9 看護職として働く際の国際的視野の必要性

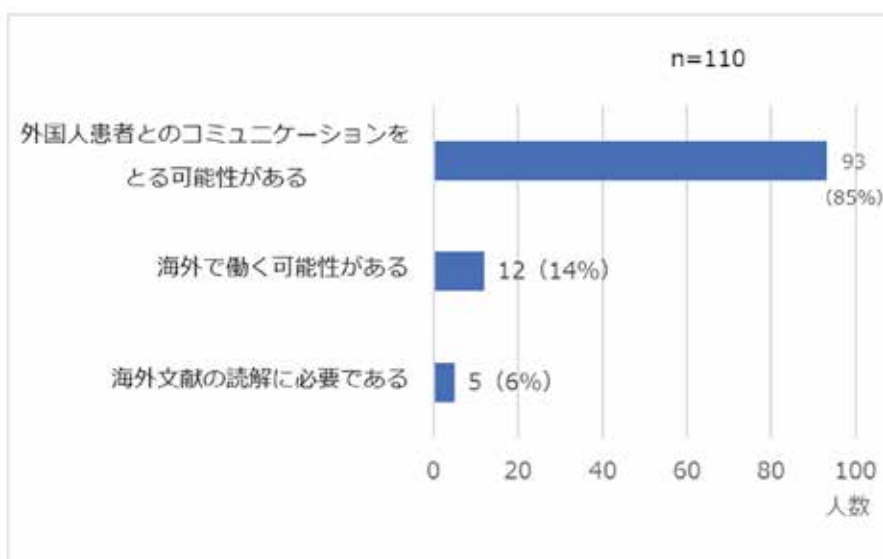


図10 看護職に他言語が必要な理由

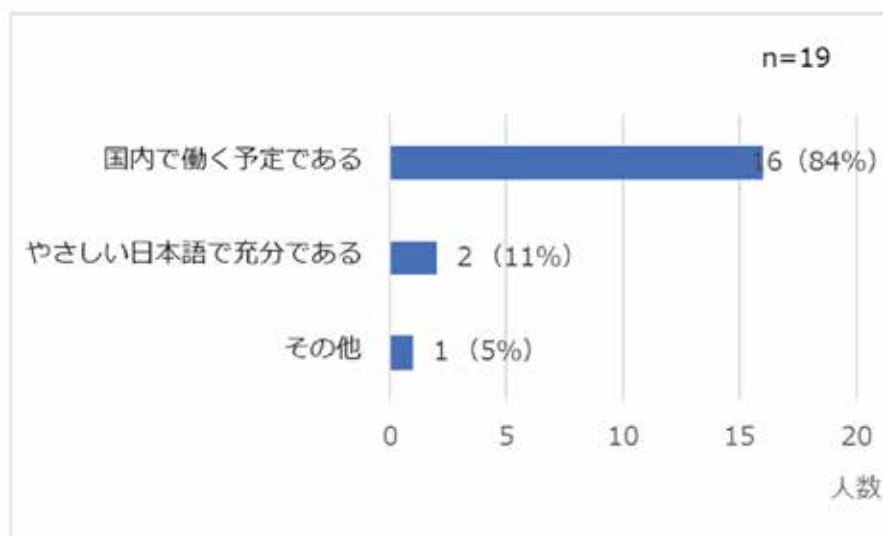


図11 看護職に他言語の修得が必要ではない理由

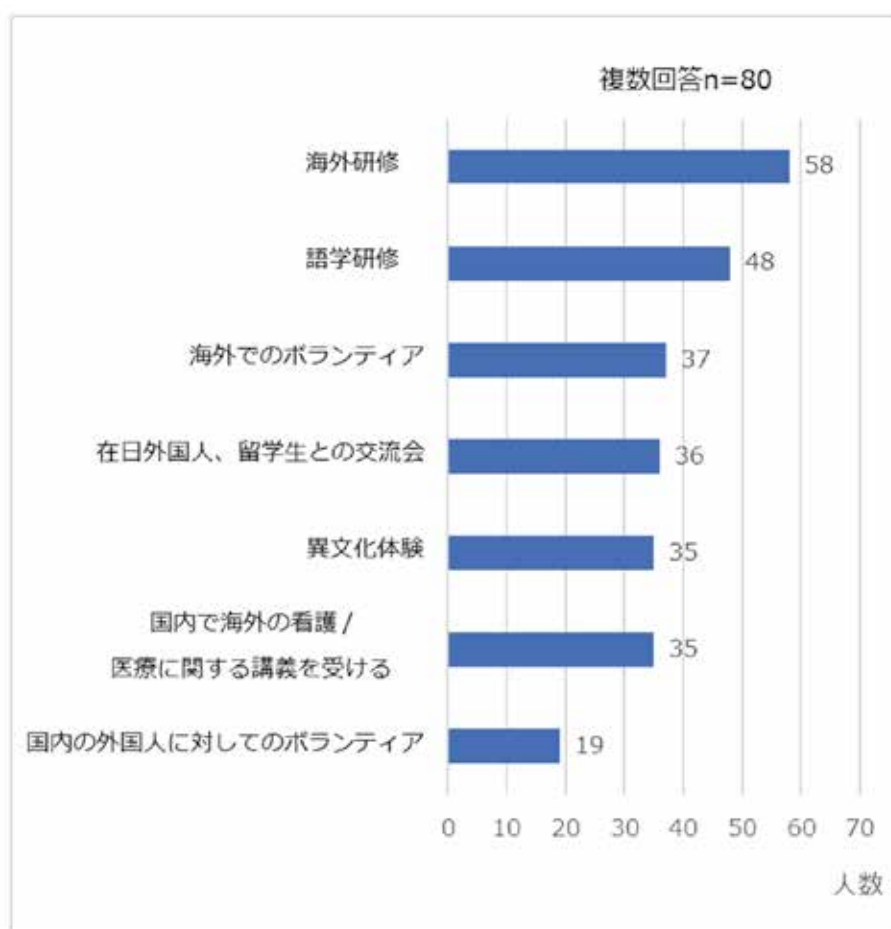


図 12 国際的活動の希望内容

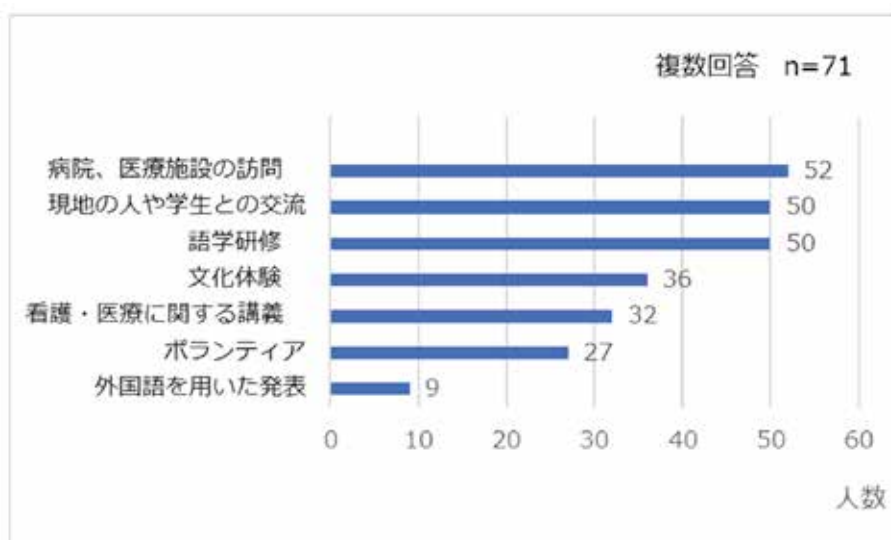


図 13 海外研修の希望内容

ていた。また国際活動ができない理由として、「経済的余裕がない」、「看護師の勉強で精一杯」、「勇気がない」などが挙げられていた。

IV. 考察

本研究は、A大学看護学生への国際経験の機会創出の支援の方向性について検討することを目的に調査を行った。これらの結果をもとに、国際的活動の

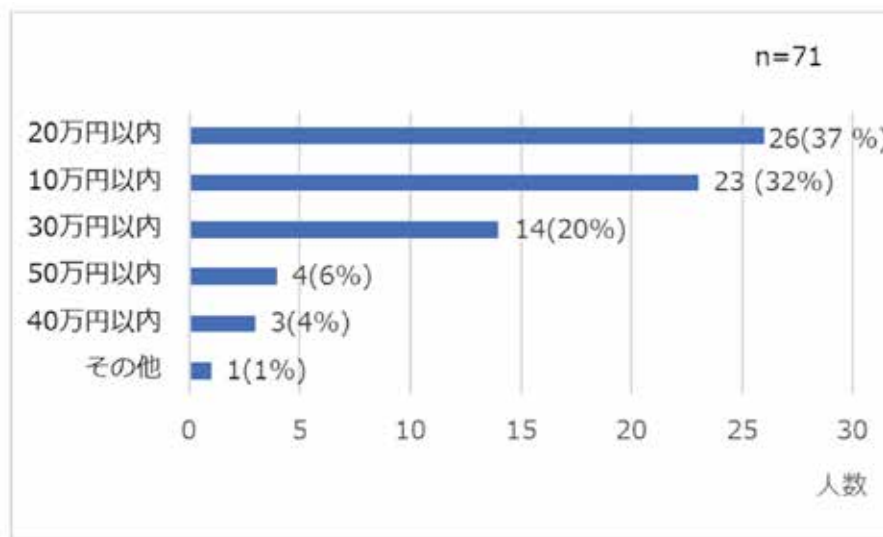


図 14 海外研修の費用の希望上限額

実態、国際的活動の意識・希望、今後の国際経験の機会創出の支援についての3点を考察していく。

A. 国際的活動の実態

今回の調査において、A大学看護学生の約4割に海外渡航経験があった。渡航先としては、アジアや太平洋州と比較的飛行時間が短く、日本から近い国への渡航が多いことが特徴的であった。目的は修学旅行と留学が約6割を占め、個人旅行よりも多いことが分かる。文部科学省の「高等学校等における国際交流の状況」によると（文部科学省，2023）、令和元年の高校生の外国への修学旅行人数は179,910人であり、海外渡航する理由に高校のカリキュラム学修が伴うことが伺える。学校や親から海外渡航経験を意図的に提供された可能性もあるが、それらの海外渡航の経験が大学での海外研修や国際的活動への参加意欲につながっている可能性がある。

A大学は国内外で活躍できる看護師を養成する大学として設立されており、国際的活動に興味を持って入学してくる学生が多い中、今回の調査結果からはA大学看護学生の半数程度が国際的活動に興味がない・参加しないことが明らかとなった。そのため、まずは赤十字の看護学生として4年間国際的活動へのモチベーションを維持しながら成長できる仕組みづくりが必要である。その方法として、まずは国内外で行われている国際的活動に関わる研修の情報提供を積極的に行い、研修に参加する学生を増やすことである。研修に参加した学生がカフェ・ミーティ

ングでその経験を発表することで、他の学生の内的動機付けが促され、研修に参加する学生が増加し、学生同士で成長しあえる仕組みができると考える。国外研修情報として、日本から近い国、身近な国、低コストで渡航できる国の情報を多く提供することで海外経験を促せる可能性がある。

また、外国人との交流について約6割の学生が日常の中で外国人との交流を経験していた。出入国管理局によると、A大学が所在する県は全国で9番目に在留外国人が多く、国籍は中国、ベトナム、韓国の順に多いと報告されている（出入国管理庁，2023）。アルバイト先の同僚に外国人がいる、アルバイト先に外国人が顧客で来るなど、日常の中に外国人と交流する機会があると考えられる。

さらに、今回約半数の学生がA大学の国際的活動に興味があるまたは参加したことがあることが分かり、その関心の高さがうかがえた。興味がない・参加しない学生においては、その理由が「語学への自信のなさ」、「ハードルの高さ」、「余裕のなさ」、「時間のなさ」であったことから、これらの課題に取り組むことで、さらに多くの学生が国際的活動に参加できるようになることが期待される。国際ビジネスコミュニケーション協会の「英語のスピーキングに関する実態と意識」（国際ビジネスコミュニケーション協会，2020）によると、英語の4技能（リスニング、スピーキング、リーディング、ライティング）のうち、「スピーキングが一番難しい」と回答した人が最も多く約6割を占めたことが報告されて

いる。今回の調査において学生の約 9 割が外国語検定受験の経験があり、ある一定の語学力を有しているにもかかわらず語学への自信のなさを感じるのは、スピーキングに対して感じる難しさが背景にあるためだと考える。A 大学では外国人教員との会話を楽しめるイングリッシュ・カフェという気軽に参加できる正課外活動を、令和 5 年度から月に一度企画・実施している。スピーキングができる機会としてさらに多くの学生が利用できるように、積極的に広報を行う必要がある。

B. 国際的活動の意識・希望

看護職として働く際の国際的視野（異文化理解・対応力）の必要性や、英語あるいは他言語の習得の必要性について 8 割強の A 大学の看護学生が必要と考えていることが分かった。他言語習得が必要な理由として「外国人患者とのコミュニケーションを取る可能性がある」と 8 割強の A 大学の看護学生が回答しており、看護学生として看護の現場で他言語が必要であることを認識していることが分かった。一方で、他言語が必要でない理由として、「国内で働く予定である」と回答する A 大学の看護学生も少数おり、国内にいれば他言語が必要ないとの認識の者もいることが分かった。井川らの研究では、看護学生が認識する国際看護は「開発途上国への看護、海外への災害支援、日本国内での国際看護活動」と言われており（井川，長坂，2019，p. 20）、時代とともに国際の定義の捉え方が変化している。国内の在留外国人数が増加している昨今の日本において、国内においても国際的活動の機会は多いことが考えられ、それを A 大学の看護学生が認識できるよう支援する必要がある。

今回、在学中に国際的活動や海外研修に参加したい学生が約 6 割を占めることが分かった。半数以上が国際について学びたい・経験したいという希望があるということである。多くの学生が国際的活動をできるような正課外活動を検討することが急務である。また、希望する海外研修の内容は、病院・医療施設の訪問や語学を使用できる機会、そして現地の人と交流する機会であり、研修費用の希望上限額は 20 万円以内とする学生が最も多いことが分かった。これらのことから、学生は低額で他国の医療施設の訪問や、現地人との交流を期待しているため、この情報を基に、具体的に学生が参加できる研修情報を

提供していく必要がある。

C. 今後の国際経験の機会創出の支援について

A 大学では、国際看護実践研究センターが中核となり、学生への国際経験の機会創出として国際シンポジウムやカフェ・ミーティング等の正課外活動を開催してきた。しかし、コロナ禍において自主的に参加する学生が減少している状況であった。本研究結果から学生は、今後、海外のみならず国内においても外国人患者を看護する可能性があり、そのうえで英語等の言語ツールが必要となることを想定できている。そのため、今後は海外における国際的活動の機会創出だけでなく、国内でも経験可能な国際的活動の機会の創出も必要と考える。A 大学の看護学生にとって外国人が日常にいることは当たり前になってきており、外国人患者の看護を行うことの予期はできている。そのため、お金・時間や余裕がない学生に対しても、国内で実践できる国際経験の機会の創出が必要である。在留外国人に対して血圧測定や薬の説明・同意を取るなど看護現場で遭遇する場面を取り上げ実践することで、日本にしながら国際的活動を学ぶ機会を設けることは可能であり、言語のハードルも「やさしい日本語」での対応とすれば、英語が苦手な学生も国際的活動への参加を促すことができると思う。

日本政府観光局の 2023 年 11 月の報告によると（日本政府観光局，2023）、訪日外国人数は 225 万人と新型コロナウイルス流行前の水準にまで回復している。A 大学のある宗像市には、世界遺産として登録された宗像大社もあり、観光地として宗像市を訪問する外国人も今後さらに増加すると考える。また出入国管理庁によると（政府統計の総合窓口，2023）、宗像市の在留外国人は 2012 年 510 人から 2022 年 913 人と増加しており、国内のグローバル化が新型コロナウイルスの沈静化とともに一気に拡大していると考えられる。宗像市はグローバル人材育成事業として「第 2 期宗像市グローバル人材育成プラン」（宗像市役所，2019）に則り、宗像地域国際交流連絡協議会の元、宗像市内で国際交流ができる機会を設けている。そこで、学生が宗像市内で外国人と交流できる機会のひとつとして、積極的に学生に情報を提供し参加を促すことも可能であると考えられる。今回の調査結果より、学生への国際経験の機会創出の支援の方向性として、学生に対する海外研修

や国内における国際的活動に対する情報提供と動機づけ、語学学習の促進や授業時間外で学べる工夫等が重要であると考ええる。

V. 結論

本調査により、A大学の看護学生の国際的活動の実態・意識・希望について、以下の内容が明らかになった。約40%の学生が海外渡航経験を持ち、主に日本の近隣諸国への渡航が多かった。国際的活動や海外研修に参加したい学生は約60%に上るが、時間のなさや語学に対する自信がないために、半数が参加していなかった。また、学生の8割強が看護職者として他言語の習得と国際的視野を持つ重要性を認識していた。多くの学生が希望する海外研修は病院・医療施設の訪問であり、希望する研修費用の上限は20万円以内であった。

今回の結果から、A大学では学生の国際的活動を支援するために、海外研修や国内での国際的活動に関する情報提供と動機づけ、語学学習の推進、課外活動を通じた学習プログラムの工夫が重要であると考えられた。特に、「国際」に興味を持って入学してくる学生が4年間「国際」へのモチベーションを維持できるよう、国際看護実践研究センターを中心に全学的に取り組む必要がある。

最後に、本研究の限界として、結果はA大学看護学生に基づくものであり、他大学での調査も行うことでより効果的な支援を検討できると考えられる。

謝辞

本調査にあたり、協力いただきました学生の皆さまに感謝申し上げます。また、本調査の実施について、ご意見ご協力を賜りました日本赤十字九州国際看護大学 国際看護実践研究センターの皆さまに感謝を申し上げます。

文献

濱畑章子，片岡由美子，米田雅彦，平井さよ子，古田加代子，原沢優子，星野純子（2004）．看護学生の国際交流に関する意識調査．愛知県立看護大学紀要，10，27-32．

法務省（2022/10/14）．出入国在留管理庁公表．https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00028.html [2023/10/31 閲覧]

井川由貴，長坂香織（2019）．看護学部生の異文化需

要に関する現状と課題～A県立大学看護学部のグローバル化推進に向けた教育の一考察～．山梨県立大学看護学部，看護学研究科研究ジャーナル，5，13-27．http://www.i-repository.net/il/user_contents/02/G0000632repository/knk2019002.pdf

国際ビジネスコミュニケーション協会（2020/06/08）．「英語のスピーキングに関する実態と意識」．<https://www.iibc-global.org/iibc/press/2020/p141.html> [2023/10/31 閲覧]

文部科学省（2011/03/11）．大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会第一次報告．https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/03/11/1302921_1_1.pdf [2023/10/31 閲覧]

文部科学省（2023/3/31）．令和3年度高等学校等における国際交流等の状況について．https://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/ryugaku/koukousei/20230403-mxt_kouhou02-1.pdf [2023/10/31 閲覧]

宗像市役所（2019/03）．第2期宗像市グローバル人材育成プラン．<https://www.city.munakata.lg.jp/kosodate/w051/060/0010/020/guro-baru.pdf> [2023/11/20 閲覧]

日本政府観光局（2023/11/24）．日本の観光統計データ．<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250011&tstat=000001012480&cycle=1&year=20230&month=23070909&tclass1=000001012481> [2023/11/30 閲覧]

政府統計の総合窓口（2023/07/07）．統計で見る日本 在留外国人統計 市区町村別．<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00250012&tstat=000001018034&cycle=1&year=20220&month=24101212&tclass1=00001060399&tclass2val=0> [2023/11/20 閲覧]

出入国管理庁（2023/10/13）．令和6年6月末現在における在留外国人数について．https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00036.html [2023/10/31 閲覧]

田村康子，丸山有希，溝畑智子（2016）．看護学部学生の国際的活動に関するニーズ調査．神戸女子学看護学部紀要，1，27-35．

Source

A survey on the actual status, awareness, and hopes of international activities among nursing students at University A

Mayuko Utsunomiya¹⁾ Yoshie Kotegawa²⁾ Sayo Kikuchi²⁾ Miki Onimaru²⁾ Rieko Takase²⁾
Shun Yoshihara²⁾

This survey was conducted on the actual status, awareness and hopes of international activities of the nursing students of our college, with the aim of studying the direction of support for creating opportunities for international experiences for students. A self-administered, anonymous questionnaire survey using Microsoft Forms was administered to first- through fourth-year undergraduate nursing students. The survey items consisted of three sections: [actual status of international activities], [awareness of international activities], and [hopes for international activities]. The number of responses was 130 (response rate 29.8%). As a result of the survey, approximately 40% of the students had experience of traveling abroad. As for destinations, they were characterized by relatively short flight times, such as Asia and the Pacific states, and many of them traveled to countries close to Japan. Regarding interaction with foreigners, approximately 60% of students had experienced interaction with foreigners in their daily lives. About 60% of students wanted to participate in international activities or overseas training while enrolled in school, but there were also many students who hesitated to participate in international activities due to lack of time or lack of confidence in their language skills. In light of this situation, it is important to provide students with information and motivation for overseas training and international activities in Japan, promote language learning, and devise programs that allow students to learn through out-of-school activities, as directions for supporting the creation of international experience opportunities for students. It was suggested that there is a need for a college-wide effort led by the International Nursing Practice Research Center to create a system in which students who enter our college with an interest in “international” can maintain their international motivation and grow over a four-year period.

Key words: International activities, nursing college students, awareness survey

1) Japan International Cooperation Agency Kyushu Center • Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing
2) Japanese Red Cross Kyushu International College of Nursing